

# 経済学と地理学との関係

淡川 康 一

會つて、湯淺常山をして、「制度通ナト随分文献通考杜氏通典明会典ナトヲ能ヨミテトクト吞込メテ仕立タル物ナリ、大抵ニ書ヲ精密ニ見タルハカリニテナラヌコト也ト南郭語リタヒヒキ」と、激称せしめた、伊藤東涯の制度通(享保九年・東涯自叙。寛政八年・長子善器校正上梓)は、吾人の座右書の一として、平素、愛読措く能はざるものであるか、その卷二・州県郡国の事の劈頭に、「堯ノ時禹ヲシテ洪水ヲオサメシメ天下ヲワカチテ九州トス禹ソノ境界貢賦ノコトヲ記シテ禹貢ヲ作ル是ヨリサキ九州ニ分タレテ堯ノ時ソノ法ニ従ヒタマフカ又アラタニ九州ニワカレタルカソノワケハシルベカラズ後世ニ及テ天下ノ州郡サマ々ニ更改アレトモ堯ノ時ノ九州ノ名ハカハルコトナシソレニ地理ノ書ニカナラズ是ヲ証拠トス」と説き出された一節は、地理学と社会経済学との關係に就き、精研を試みんとする吾人の、深く興味をそそがれた処である。

一

経済地理学は、経済学と所謂人文地理学との交錯する領域に、その研究範囲を求む可きてあり、従つて、斯学

の研究には、人文地理学に通暁する要あるのみならず、又、経済学の原理及び其の考察方法をも等閑に付することを得ない。経済学と地理学、此の両科学が、如何なる関係にあるか、是れ、拙稿の企図する処である。

経済学と地理学とが、極めて密接な関係に置かれていればこそ、ここに、経済地理学の成立を見るのであって、等しく人文地理学の分科であつても、経済地理学は、他の政治地理学、民族地理学、宗教地理学、文化地理学等に比すれば、日常生活との関係、最も密なるものが、認められるのである。即ち、地域の自然と、欲望充當を目的とする物質的手段の計画的創造及び応用に向けられた人間行為、即ち経済行為とを連結する面に、その研究領域が横たわり、屢々、応用科学の称呼すら、与えられているのである。

抑々、経済行為なるものは、人類發生の当初より存在するのであるが、而かも、経済地理学的研究は、漸く輓近に入つて、擡頭し來つたことは、独得な事実として、銘記せなければならぬ。従つて、地理学と経済学との關係に就いても、漸く最近に至つて、考察が加えられ、此の風潮は、勢い、経済地理学の立定にまで進展したのであるが、此の両科學の關係を明白にすることは、経済地理学をして、一層、合理的計画及び利用の基礎として、役立たしめることになるであらう。

現今、世界經濟が、人類を給養し、且つ、是に、物質的素材を供給する方面に、その重要なる一使命を有するとすれば、両科學の關係を明白にすることは、單に経済地理学の認識に資するのみならず、実業家、經濟學者、政治家、技術家、凡そ是等の人々の専門的分野に、裨補する處、著しいものがあり、更らに、一般人士にとつても、当面の時事問題の理解を容易にするであらう。

経済学と地理学との關係を考察するに當つても、一応、顧みる可きは、地理学の定義であらう。地理学とは何ぞや、地理学に独得な職能は、如何。此の問題は、すでに、多くの地理学者によつて、夫々、独自の立場から、解決された処であるが、吾人は、リヒトホーフェン (F. v. Richthofen, 1833—1905) 以来の提唱にかかる、地理学は地表 (die Erdoberfläche) に関する科学なりとする定義を、最も適當なものと、信するのである。此処に所謂地表 (die Erdoberfläche) は、彼の数学に於ける球体の如く、抽象的なものに非ずして、具体的なものである。即ち、気圈の下層部と、岩圈の上層部とを含み、又、如何なるものによつて、充満されているか、凡そ、是等總ての現象の因果的關係を包括するのである。而して、此場合、地表 (die Erdoberfläche) の空間を、充満しているものには、単に、物質的に認識されるのみならず、又、あらゆる本質的特性をも、包含せしむ可きであらう。此の特性は、他の現象から、唯間接的にのみ、誘導される場合、元より妨げず、あたかも、織ての種類の力を、その作用から、推定する時の如き是である。かく觀来れば、人類は、単に、身体的目的として、地表 (die Erdoberfläche) の充満物に属するのみならず、又、その本質及び作用を必要として、此本質及び作用は、空間の真相、即ち、所謂景觀 (Landschaft: die Landschaft) の一部を構成するものとして、考察す可きであらう。而して、たえず、景觀 (Landscape; die Landschaft) の実相に影響し、且つ、是を形成するものである。人類の、経済地理学に対する、此の意義は、フリードリヒ (F. Friedrich) によつて、千九百年以来、特に強調され来た處であつて、その採用した研究方法は、經濟發展の段階が、如何に、自然から、支配されたかを、主眼としたも

のである。<sup>3)</sup>

地理学が、其の本質を、空間の科学たることに求め得る限り、経済地理学は、空間と人間の経済との關係を探求することに、其の職能を見出す可きである。故に、先ず最初に把握す可きは、空間たる地理的基礎が、如何に、経済を規制しているかの問題である。換言すれば、空間と経済との間の因果的關係とも、見ることが出来る。かくして、空間と経済との間の第一の關係が、見出される訳であつて、此の關係は、大体に於いて、空間と其の充滿物が、場処、方法及び原因を標準として、人間の経済へ及ぼす作用を明かにするものにある。而して、此の部門に於いては、地理的因子の作用が、主眼に置かれるのであるから、地理学的認識が、最も強く、要求されるのである。

然るに、一方、経済の管理者としての人間は、内的にも、又、外的にも、人間の側に於いて、空間の作用に對して、反動作用を起し、而かも、此の反動作用は、その一般的な性格に應じて、又、個人的な性格に従い、種々、異なるものである。かくして、空間には、変化が、生ずるのみならず、又、このことによつて、経済上の欲望に基づく如く、諸力が、空間に於いて、喚起され、人間の側に於いて、又、更らに、空間の性質に應じて、充滿された空間を、人間の経済を恵与する為めに、影響を及ぼすのである。此の際、空間及びその充滿物が、變動を蒙る限り、地理的現象として、把握され、而して、是等現象の分布及び關係は、何れも、経済地理学の研究範圍に属するのである。而して、第一の研究部門に比較すれば、人間の経済を重視することになるのであるから、経済学的認識が、一層強化される可きであらう。

かくして、経済地理学の研究及び認識に對しては、先ず、空間が人関経済に及ぼす作用、次には、人間経済が、

空間に及ぼす作用、此の両者が、並立することになる。而して、此の両者は、原理的には、等しく、正当付けられていても、現実の問題としては、勿論、空間が、経済に及ぼす作用か、又、経済が、空間に及ぼす作用か、此の何れか一方が、勢力を得る訳である。此の關係を、簡単に表現する術語として、交互作用 (die Wechselwirkung) と云う語が、慣用されて居り、かくて、経済地理学は、その充滿物を有する空間と、人間経済との間に起る処の交互作用を論じ、是等現象の分布及び結果に就いて、是を説明する科学なりと、定義することが出来る。

科学に於ける目的としては、斯学は、交互作用 (die Wechselwirkung) の観点の下、自然景觀並びに人間の經濟によつて形成された所謂經濟景觀の真相を把握し、且つ、是を研究、認識することが、挙げられ、更らに、實際に於ける目的としては、空間の、總ての自然現象及び事例を、人間經濟の要求の爲めに、出来るだけ利用する様に、努む可きである。

かく觀来れば、斯学独自の立場としては、純地理学的概念たる景觀が、人間經濟と云う特殊な關係の下に把握されることが、挙げられ、このことは、又、同時に、経済地理学が、地理学に歸属することを、示すものである。

1) vgl. Lautensach in Handbuch der Geographie. I.

2) vgl. II. Wagner: Lehrbuch der Geographie. I. Bd. 1920. S. 26—7.

3) 拙著・経済地理学・一三頁参照。

## 三

以上、経済地理学の本質を略述し、斯学は、その性格上、地理学に歸属することに、論及したのであるが、然

らば、次に問題にす可きは、その、経済に対して有する関係を、如何に、考ふ可きであるかの点である。

吾人は、此の問題を解決する研究方法として、経済発展段階説（Economic Stage; die Wirtschaftstufe）を、地理学の観点より、検討することが、最も目的に合する様に、思うのである。

抑々、経済発展段階説（Economic Stage; die Wirtschaftstufe）は、経済史の研究に於いては、極めて重要な根本概念の一に属し、欧羅巴、特に独逸の経済学者は、或いは生産の状態の上より観、或いは交換及び一般取引の方法の上より観、或いは又生産と消費との関係より観て、経済発達のの段階に關し、種々なる説を立て、以つて、経済発達の大体の趨勢、一般の傾向を考察するに、資するものである。<sup>1)</sup>

経済史に所謂経済発達段階説（Economic Stage; Wirtschaftstufe）は、元より、時間的、立体的なものであるが、経済地理学の立場より、是を採用する時は、空間的、平面的なものとなることは、一般に、歴史と地理との間に観られる、夫々の本質的特徴から来る当然のことである。

然らば、経済地理学の立場よりすれば、経済発展段階説（Economic Stage; die Wirtschaftstufe）を、如何に立定す可きであるか。一般に経済の発達を支配する条件としては、広く、自然、人種、社会制度等が挙げられているが、此の中、最も地理学的認識に合致するものは、自然であろう。<sup>2)</sup> 自然は、是を分析すれば、氣候、土壤、水量、動物界並びに植物界、自然力及び自然の素材等となるのであるか、是等は、何れも、経済の自然地理的基礎となり、以つて、夫々の地域の経済を規制する自然制約（der Naturzwang）と観る可きである。而して、斯学に於いて、採用する経済発達段階説（Economic Stage; die Wirtschaftstufe）は、人間経済が、此の自然制約（der Naturzwang）から距たる距離の大、小を標準として、区劃することが、最も合目的である様に思うのである。而

して、初めて、此の点に着眼して、経済発展段階説 (Economic Stage: die Wirtschaftsstufe) を立定したのは、前にも論及した処であるが、エルンスト・フリードリヒ (Ernst Friedrich) であろう。<sup>3)</sup> その区劃は、反射又は動物の段階 (die reflexive od. tierische Stufe)、『本能又は順応の段階 (die instinktive od. angepaßte Stufe)』、『伝統又は伝承の段階 (die traditionelle od. überlieferte Stufe)』及び合理的又は科学技術の段階 (die rationale od. wissenschaftlich=technische Stufe) の四段階を認めるのである。是等の段階が、人間の経済が、自然の強制から距たる距離の大小を標準として、設けられたるに對し、氏は、更に、経済形態 (die Wirtschaftsform) として、人間が、その経済上の目的を追求する方法の、種々異なる型を区別している。是を区劃するに當つては、元より、多くの標準あるも、食糧及び必需品の調達を基準として、採集経済 (die Sammelwirtschaft)、『狩猟及び漁撈、種々の形態の植物耕作、動物飼養及び手工業、工業、商業並びに交通の主要形態が設けられてゐる。』

一般に、低い文化段階 (die Kulturstufe) 及び経済段階 (die Wirtschaftsstufe) の民族は、『又、簡単な経済形態 (die Wirtschaftsform) を採り、例之、原始民族は、屢々、唯一の経済形態 (die Wirtschaftsform) を持つに過ぎないが、高い段階にあつては、数個の形態を併有するものであるから、主要経済形態 (die Hauptwirtschaftsform) と補充経済形態 (die Ergänzungsform) の別を認む可く、例之、海岸地方及び水量に富む地域に於いては、漁獵は、原則として、この補充形態 (die Ergänzungsform) に過ぎず、又、家畜の飼養が植物耕作の傍ら、営まれてゐることが、多らのである。』

経済段階 (die Wirtschaftsstufe) に対して、経済形態 (die Wirtschaftsform) を区別することは、極めて重要であつて、前者が、抽象的概念たるに反し、後者は、具象的概念として、兩者相俟ち、各地域の経済の実相を明か

ならしめるものである。例之、中国は、一般に、尙お、伝達経済の段階にあるものとせられ、財部博士、會つて、其雄篇・「支那南北弁」に於いて、「進運地域ヨリ不変ナル旧思想地域ニ移ルニ、旅程哩数数十否数百ヲ運ルノ要ナシ。第二世紀ヨリ明朝(ソノ滅落ハ第十七世紀後半ノ初期ニ属スルヲ注意ス)ニ還ルハ間々眼前ニ数歩ヲ運フノ一些事ニ過キス、兩者何レカソノ一ツノ眺望内ニ、輓近ノ一大工場ト質素ナル藁葺農家トヲ收メ得ヘシ」と説かれし如く、<sup>4)</sup>中国の経済段階(die Wirtschaftsstufe)は、今も昔も、尙お、同じ段階に停滞している。<sup>5)</sup>一方、その経済形態(die Wirtschaftsform)を見れば、例之、農業に就いては、北支に於いては、鋤耕(der Pflugbau)が、又、南支にあつては、高地耕作が、夫々、その主要なる形態とされているのである。<sup>6)</sup>凡そ、経済形態(die Wirtschaftsform)が、原始産業の性格を帯びる程、益々、氣候、土壤、地形、其の他の自然によって、条件付けられること多く、夫々の経済形態(die Wirtschaftsform)は、唯、特定の地方に於いてのみ、分布するのである。従つて、是を、歴史的に、一の發展段階として、理解するには、多くの困難を伴う訳である。

(一) 内田博士・日本経済史研究・下巻・三八八頁以下参照。本庄博士・経済史概論・昭和二十六年版・七六頁以下参照。

(二) 石橋博士・自然と経済(国民経済雜誌・第一卷・第四号)・参照。

(三) vgl. E. Friedrich: Wirtschaftsgeographie. I. Bd. 3. Aufl. S. 78ff.

(四) 財部博士・支那及印度経済論・七二頁。

(五) vgl. K. Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft. 2. Bd. 8. Aufl. S. 329; 拙著・経済と地理・一六六頁・参照。

(六) vgl. A. Hettner: Grundzüge der Länderkunde. 2. Bd. 4. Aufl. S. 124.

前掲四個の經濟段階 (die Wirtschaftsstufe) の、夫々の特質を略説すれば、先ず、反射經濟 (die reflexive Wirtschaft) は、あらゆる經濟行為が、飢餓、倦怠、寒冷等の欲望に対する反射として、表われることに、その本質が認められ、例之、飢餓を感じると、眼前に横たわる果実、草根、昆虫等を採集し、是を食い尽すのみで、自然を、そのあるがままに受け容れ、何等、是に対して、影響を及ぼすことなく、その欲望充當に際して、完全に、自然に依存するのである。

次の段階の本能經濟 (die instinktive Wirtschaft) は、夫々の地方の自然事情に応化する処の、人間の、本能的な經濟的經驗を包含し、前の段階に対して、進歩を認む可きは、身体以前の活動手段を利用する点であって、例之、自然の制約から解放されるために、最広義の道具を使用し、かくて、自然自体に対して、或る程度の影響を及ぼすことになり、欲望の充當は、時間的に、場地的に、又、量的にも、質的にも、前の段階に比して、一層、自由になるであろう。

第三の段階たる傳統經濟 (die traditionelle Wirtschaft) は、最初意識せざるも、漸次、伝承、固定した処の、道具及び方法の發達によって、經驗が、財宝として、經濟を支配する点に、その本質が求められ、かくて、此の段階にあつては、一般文化の進歩と關聯して、著しき、經濟的進歩が認められ、例之、灌漑を伴う集約的土地耕作、金屬の採集及び利用、分業、手工業、工業、商業及び交通の發達、凡そ、是等の事例は、更らに、次の段階への發展を表徴するものである。

最後の科學技術經濟 (die wissenschaftlich=technische Wirtschaft) は、最高の段階として、總ての經驗が、自然の制約に対して、目的を意識して集積され、科學及び技術の、總ての手段を以つて、自然を、意識して、經濟の

目的の爲めに、克服する点に、その特徴が認められる。

以上、四個の段階に就いて、その特質を略記したのであるが、伝統経済(die traditionelle Wirtschaft)の段階に於いて、初めて、経済景観(die Wirtschaftslandschaft)の觀念を認む可きである。蓋し、屢々、広大な地積が、耕作及び灌漑施設、聚落並びに交通路等により、根本的に、変化されるからである。ここに、少くし、経済景観(die Wirtschaftslandschaft)の意義に就いて、述べる必要がある。是に關しては、先ず、自然的景観(die natürliche Landschaft)と自然景観(die Naturlandschaft)の兩觀念を、明かにせねばならぬ。自然的景観(die natürliche Landschaft)は、原始的に保存されて、人間の影響が、永久に加わりたる天然景観(die Naturlandschaft)とは、峻別される可く、總ての自然的標識を顧慮して、それ自体、その隣接の景観から區別され得る、独自の特徴を具えている景観を指示するのである<sup>1)</sup>。

人文景観(die Kulturlandschaft)と云う専門語も、屢々、使用される處であつて、人間によって、創造された景観を、広く、人文景観(die Kulturlandschaft)と稱したこともあるが、然し、文化景観(die Kulturlandschaft)と云う様な概念は、人間によって影響された景観を、すべて、包含するものとすれば、余りにも、漠然として、適當なものではないと思う。凡そ、文化(die Kultur)なる概念が、人間の精神的な生活内容及び調和的な生活基準を包括するものとすれば、所謂、文化景観(die Kulturlandschaft)は、人間の作用が、調和的な、美的なものとして、景観の実相に表現された面を指示す可きであり、例之、日本に於ける寺院景観(die Tempellandschaft)の如き、是であらう<sup>2)</sup>。

経済景観(die Wirtschaftslandschaft)は、経済を管理する人間が、文化的影響を顧慮することなしに、単に、

物質的利用と云う観点の下、自然景観 (die Naturlandschaft) を変革して、生ぜしめたものである。

自然の強烈な諸条件は、原始的な経済段階 (die Wirtschaftsstufe) 及び是に属する経済形態 (die Wirtschaftsform) に於いて、存在し、最高の段階にあつては、自然景観 (die Naturlandschaft) の要因の作用は、僅かとなり、経済を管理する人間が、是等の要因に対して、単に受動的のみにならず、又、是に、能動的に作用せんことを、試みるのである。然し、此の目的の爲めには、経済地理に於ける事實的基礎の探求及び認識を前提とせなければならぬ。従つて、経済的に見て、重要な地域が、個々の景観の中の、何れに帰属するか、即ち、自然的な経済景観 (die Wirtschaftslandschaft) の分布及び大きさの問題は、斯学に於いて、最も重要な地域を占めるであらう。

人間の経済が、自然景観 (die Naturlandschaft) に及ぼす作用は、その方法及び範囲の点に於いて、元より、時間的に見て、極めて、種々なる様相を呈するものである。経済を管理する人間の特性及び数、経済の目標に依存するは勿論、又、他方に於いて、気候、肥沃なる地表、地産、豊富な森林、その他の地理的因子に支配され、是等の地理的因子には、一般に、恒常不変的なものであるが、人間の作用は、断えず、変化の過程に置かれ、特に、経済の目標に至つては、急変すること多く、従つて、経済景観 (die Wirtschaftslandschaft) は、常に、変動を受けるものである。英国に於ける穀物関税の廃止が、曾つて、普及して居た処の農業を制限し、爲めに、耕地景観 (die Felderlandschaft) は、やがて、現今見る様な遊園景観 (die Parklandschaft) へ、変化するに至つたのである。

経済を営む人間が、景観に影響し、且つ、是を変化する作用は、一般に、高度の経済段階 (die Wirtschafts-

stufe) 及び発達したる経済形態 (die Wirtschaftsform) にあつては、その低位のものに比して、一層、強烈であり、且つ、永續性を有する。自然と経済との關係に於いて、経済が発達すると云ふことは、疎放状態から、集約状態へ進展することを、意味するに外ならぬのである。<sup>4)</sup>

かく見来れば、経済地理学の研究に於いて、経済学の占める地位は、今後、益々、重要なものとなるであらう。

(一) vgl. H. Wagner: Lehrbuch der Geographie. 10. Aufl. 1. Bd. S. 36.

(二) vgl. Meeking: Kult und Landschaft in Japan. Geogr. Anz. 1929.

(三) 本庄博士・経済史概論・昭和二十六年版・六九頁以下参照。

(四) vgl. v. d. Borgh: Das Verkehrswesen. 2. Aufl. S. 8—9.